

気管支喘息患児のアンケート調査を実施して

今井初枝¹⁾・川村千賀子¹⁾・本間富士子¹⁾
山貝ハルエ¹⁾・高橋光江¹⁾

はじめに

私達は、昭和60年7月から8月にかけて計4回にわたり当院小児科受診中の喘息患児を対象として、外来ナース、ドクターと共に「喘息教室」を開催した。

これを機会にアンケート調査を実施し、患児の実態を把握することにより、入院してくる患児、家族とくに母親とのかかわりがうまくいき、よりよい看護、援助ができるのではないかと考えた。そのアンケート調査の結果を報告する。

I アンケート調査の方法及び対象

- (1) 調査方法：喘息教室終了後アンケート用紙をわたして必要事項を記入してもらい、当日あるいは後日郵送にて回収した。
- (2) 調査対象者：喘息教室受講54名
- (3) 調査期間：喘息教室開催日 7/30, 8/6, 8/20, 8/27
- (4) 回収率：配布数54枚、回収数39枚（うち男26枚、女13枚）、回収率は72%であった。

II 調査結果及び考察

1. 調査時の患児の年齢

外来通院患児200名中、今回の受講者は54名であった。幼児期、学童期患児が多くを占めた(図1)。

2. 性格

「外向的」が多くを占めているが、多分に母親の主観が入り、また性格を重複して答えている母親もおり、一概にはいえないと思われた(図2)。

¹⁾ 村上病院第二病棟

図1 年齢

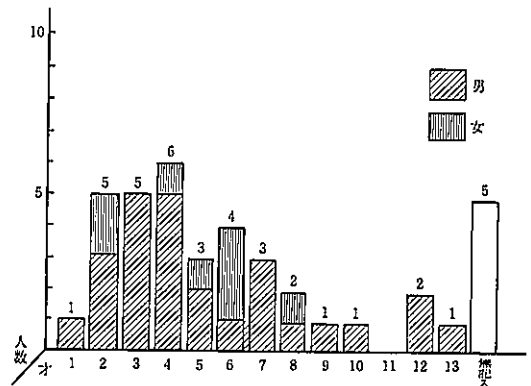
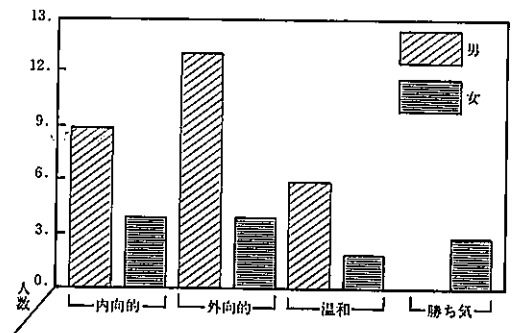


図2 性格



3. 発症年齢

最近の傾向としては、1才以下で発症する乳児喘息が増加傾向にあるといわれているが、1才から3才までの発症が過半数を占めた(図3)。

4. 発作をおこしやすい季節

一般的に喘息発作をおこしやすい季節は、秋ついで春といわれている。これは、気温の変化や抗原となりうるほこり、花粉、ダニの死がい、糞便などに関連していると考えられる。今回のアンケ

ート結果でも秋に最も多かった(図4)。

図3 初めて医師に喘息と言われた年齢

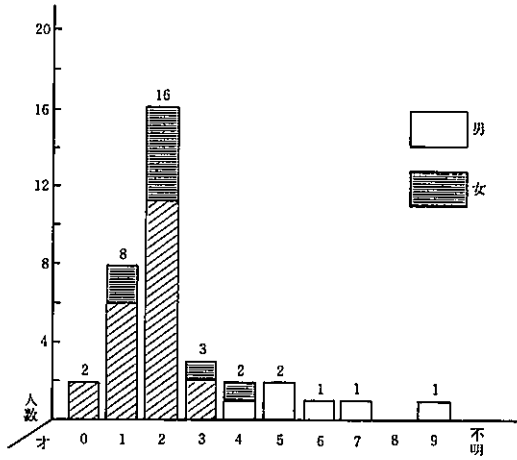


図5 おこしやすい曜日

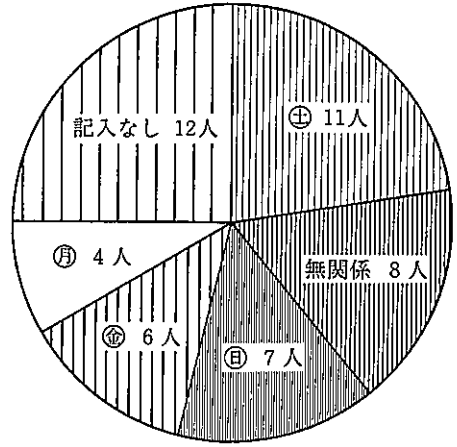


図4 おこしやすい季節

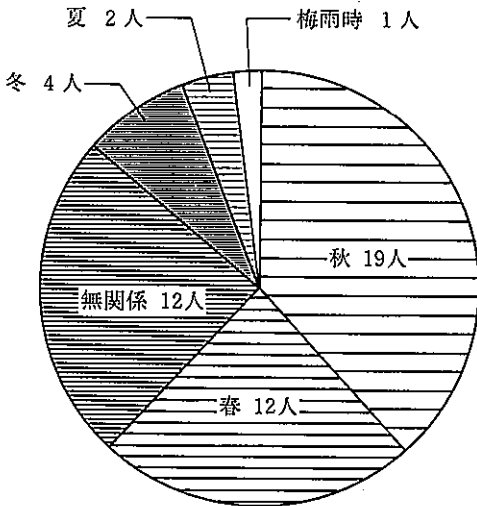
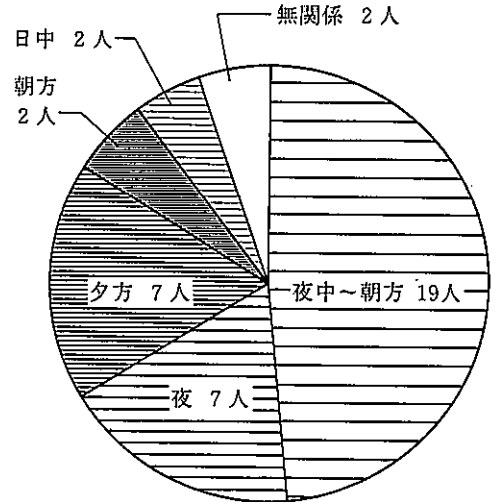


図6 おこしやすい時間帯



5. 発作をおこしやすい曜日

週末に多かった。この理由として学童期においては一週間の身体的疲労の蓄積、幼児期においては家人との外出などにより運動量が増し、さらに精神的な興奮が加わることなどが推察された(図5)。

6. 発作をおこしやすい時間帯

夜中から朝方の夜間帯に最も多かった(図6)。

7. 乳児期の栄養法

62%が乳児期には混合栄養であった(図7)。

8. 離乳食開始時期

生後6ヶ月の開始が多も多く、全体的には生後6ヶ月迄に85%が開始している(図8:①)。

気管支喘息などのアレルギー疾患の抗原となりうる牛乳・卵の与え始めた時期は、牛乳では約半の人が1才未満に、卵は約半の人が6ヶ月以内に与えている(図8:②③)。

しかしコントロール・スタディを行っていないため、一概に卵や牛乳を与えるのが早かったために喘息が発症したとはいえない。

図7 乳児期の栄養法

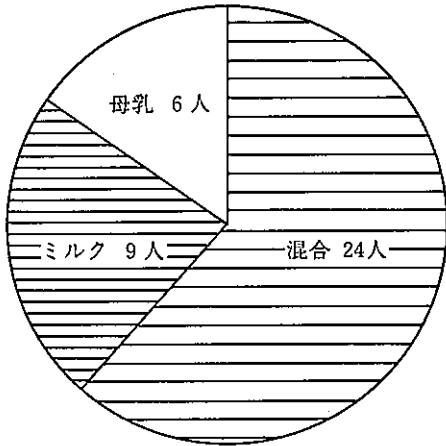


図8:③ 卵はいつ頃から与えたか?

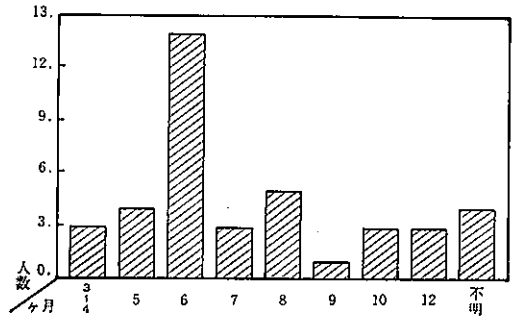


図8:① 離乳食の開始時期

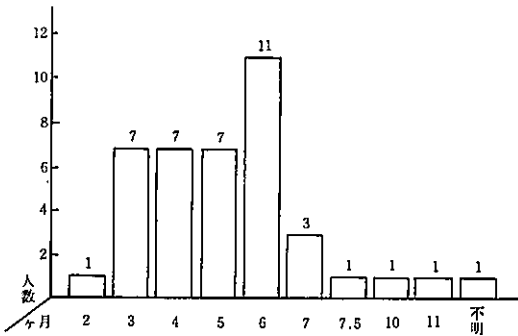
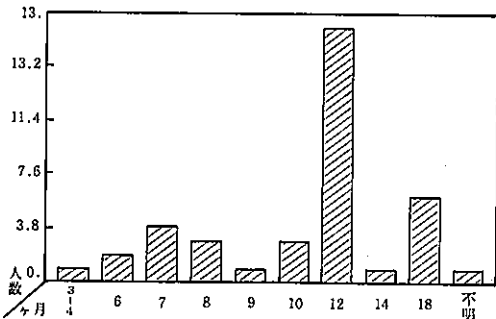


図8:② 牛乳はいつ頃から与えたか?



9. 家族歴について

3親等内の気管支喘息, 食物アレルギー, アレルギー性鼻炎, アトピー性皮膚炎の有無について質問した。アレルギー性鼻炎を両親にもつ患児が

多く, アレルギー体質の遺伝が本症の発症に関与していることが示唆された。

10. 家族の患児に対する不安について

喘息発作時の症状(喘鳴, 呼吸困難)や, 非発作時の体調(体重が増えないこと, 食欲がないこと, 吐くこと, 風邪をひきやすいことなど)についての不安が多かった。

11. 喘息発作時の対処の仕方

とりあえず2~3時間家で様子をみるという答えがほとんどである。これは, 発作の時間帯が夜間に多いということと, 母親がくりかえす喘息発作に対して余裕をもって対処できるようになってきたためと考えられる。

家で様子をみている間の対処の仕方は次のようである。

- ・環境を整えて身心の安静に努める。
- ・薬を飲ませて様子をみる。
- ・水を飲ませながら安静にして様子をみる。
- ・熱をはかる。

12. 日常生活で注意していること

家の中の清掃をこまめにし寝具を干したりしてほこり, ダニ, カビの除去に努めている例が多く, またふだんから身体を鍛えるために水泳や乾布まさつなどをしている例もあった。

13. ペットを飼っているかどうかについて

飼っていない人がほとんどだったが, 犬や猫, 小鳥を飼っている人が8名いた。

14. 精神的誘因で喘息発作がおこると考えられるかについて

喘息発作は精神的誘因でおこることがあるとい

われている。その誘因となるものに「親が神経質である」こと、「本人のストレス」などの答えがかえってきた。

15. 喘息教室で学んだこと

母親が今回の喘息教室で学んだことは、喘息の原因、病態、治療についての理解、発作時の対応、腹式呼吸、喘息体操のやり方などがあげられた。

感想としては、喘息発作に対する不安が軽減された。講義のスライドが、子供にもわかりやすく喘息に対する理解が深まったなどがあげられた。

希望としては、来年ももう一度実施して欲しい、1対1で自分の子供の病状を詳しく聞きたいなどがあげられた。

おわりに

過去3年間の9月から11月にかけての3ヶ月間の喘息患児の入院延べ数を調べた結果、昭和58年

32名、59年64名、60年18名という結果だった。60年の入院数が少なかった原因として、トラニラストをはじめとする発作予防薬の効果と共に、喘息教室を開いて、母親に喘息の病態や発作時の対処の仕方について理解を深めてもらったことも一因になっているのではないかと思われた。また病棟では、自宅あるいは外来での治療で軽快しないために入院してくるケースがほとんどなので、アンケート調査結果で示したように、喘息発作を起こさないよう願いながら日常生活においても環境を整備したり、スポーツをさせたり、食事に注意したりして努力している患児及び家族の心境を十分考慮して、対応してゆかなければならないと思われた。

最後に今回の喘息教室を開催するにあたり御指導、御協力をいただきました当院小児科医長渋谷義弘先生に深謝致します。

参 考 文 献

- 1) 平尾敬男：家庭環境と気管支喘息。小児科診療, 44: 1779, 1981.
- 2) 根本紀夫：施設入院療法。小児内科, 14: 353, 1982—3.
- 3) 三河春樹, 末広豊：喘息児の生活指導。小児内科, 14: 361, 1982—3.
- 4) 平谷美智夫, 武藤一彦：親と子の喘息教室「喘息と上手につきあうために」。金大医学部小児科教室, 1985.
- 5) 信太隆夫：シリーズ／ナーシングプロセス, 気管支喘息患者の看護。クリニカルスタディ, 6: 1423, 1985.